

## 平成25年度「みえの現場・すごいやんかトーク」(大台町)の概要

6月25日(火)に大台町の領内地域避難所で「みえの現場・すごいやんかトーク」を開催しました。

当日は、地域で防災対策に取り組む皆さん9名の方にお集まりいただき、平成16年の台風21号豪雨の体験、防災時体制表の取組内容、行政へ期待していることなどについて、ご意見などをお伺いしました。



### 【参加者からの発言】

参加者の皆さんから、以下のようなご意見をいただきました。

- 小滝区では、平成16年の台風21号豪雨で大きな被害を受けた。これをきっかけに、災害時の避難について検討を始め、前々区長時代に、避難情報が出たら全員が所在地を役員に連絡するという体制を作った。移動手段がない人には、対応する責任者を決めている。前区長時代には実際に3回避難をした。避難時に連絡がつかない人は減ってきており、段々徹底されてきている。宮川は雨に強いと言われてきたが、平成16年9月28日からの降りは経験したことがないもので、当時、避難するという事は全く想定できなかった。
- 現在57歳だが村では若手であり、地区では一番若い。小滝区に104人住んでいるが、70歳以上が50人ぐらい。高齢地区なので、そのうちに車を運転できなくなる。避難するにも、どうしたらよいか分からないということが何年か先に見えてくる。

60歳の定年までは大阪に住んでいた。三重に住むとは思ってもみなかったが、妻の実家に移り住んだ。当初は、こんな田舎に住めるかなと思ったが、自然や空気の良さがあり、いいところだなと最近感じている。小滝区は危険地域に指定されているところが多く、少し雨が降り続くと、裏の山が崩れるのではないかと気になる。

3年前に母親の介護のために愛知県春日井市から帰ってきた。35年ぶりに帰ってきてすぐに、台風で避難所へ行くことになりびっくりした。そのときに、防災時体制表があり、区長や役員が出入口で避難者を確認していた。いいことだなと感心した。愛知県では避難することがまずなかった。台風で停電することもなかった。

災害が起きる可能性があるときにどのような体制にしたらいいだろうと試行錯誤をし、みんなでいろいろ相談して防災時体制表を作った。目的の第一は、組員に災害が起きる可能性があるときに、どこにいるかを区で把握することである。親戚や家族を頼っていくとか、老人ホームにいるということをはっきり知らせてもらえると、二次災害の防止になる。移動手段がない人の緊急時の移動についても体制ができる。メンバーが変わるので、体制表を半年サイクルで変えていく必要がある。

高齢者、危険箇所等を考えながら体制表の検討を進めた。高齢者で移動手段がなくて亡くなる人があったので、自動車所有者、免許所有者を確認した。今のところ、何とかこの状態で維持できるようになった。高齢者の方の話を聞くことを重点的にやった。一人暮らしの高齢者の話を聞くことも大事で、取組に協力してもらえる。

Q 防災時体制表の作成や地区防災の取組にあたって、大変だったこと、苦労したこと、時間がかかったことは何か？ また、取組に参加している住民の声はどうか？

平成16年の災害時には、行き場所が全く分からない人がかなりいた。電話は全然通じない。近所の人もいない。10月3日時点で小滝区の38名が避難していたが、これを把握するのに3時間以上かかった。そういう経験があったので、みんなで考えて、体制を早く作ろうということになった。

みんな生まれて初めての災害だった。最悪の事態になったので、こういう体制を作ろうということになった。あの災害がなければ、こういうのはできなかったと思う。身内ばかり、ほとんど親戚みたいな村でも、問題は起きる。避難はみんないやだ。でも避難しないといけない状態は分かっているので、警報が出ると皆さん集まるようになった。避難勧告、避難指示も把握している。一度怖い思いをしないとできない体制表だと思う。5年ぐらいかけてやっとまともなものになった。

65歳以上ばかりの限界集落だが、みんな達者である。この体制を作るときも、みんな協力的で、名前だけでなく、実際に動いてくれる。40代、50代の人もあるが、職場が遠く、仕事へ出ている。その人たちはメンバーに入れても形だけになる。

この体制表は移動手段を持たない方を対象に考えられている。自分から役員に居場所を伝えるのが大事。災害が起ると、息子・娘は心配して家に電話をする。電話が通じないので余計に不安になる。外に出ている息子・娘に、家の状況を伝えることも考えるべき。万が一のときに、連絡するのはどこかを確認することが大事。

離れていても大台町内に息子や娘がいることが多い。台風の接近は天気予報で早い時点で分かるので、家族が台風の間だけでも親を連れに来てくれるとありがたい。もっと遠いところにいる子どもでも、親をフォレストピアや、やまびこ荘に預ける

人が増えてきた。安全と思われるところにあらかじめ避難してくれた方がよい。親は今歩くことができずに、車いすで移動している。災害で避難勧告・指示が出てもどこへも行かん、と言っている。歩けない人は、車いす用のトイレもないので、家であきらめるのかなと思う。

高齢者は災害時でも自宅から出ることをいやがることが多い。特に、80歳以上の高齢者は、我が家にいるという人が多い。そういう人を無理矢理に連れ出すのは難しい。なるべく皆で支え合って、避難する方向にもっていかないといけない。

Q 取組の経験を踏まえ、防災等について県や町に提案したいことはあるか？

宮川に堆積している土砂を、津波が来る可能性がある地域に持って行って、コンクリートで固めて、小さな山を造ってはどうか。そうすれば一石二鳥である。そこに応急の食料や水、簡易トイレを置いておけばいい。津波は早く逃げないといけない。こちら土砂を撤去してもらえれば助かる。

避難所で見ていると、大台町の職員は本当によく動く。僕らも動けるので、ある程度住民の方にもボランティアの募集をかけて、緊急の時には動けるような体制を作ったらどうか。それと不思議に思ったのが、建設業は意外と動きが遅い。台風時の待機など、県から指示は出ているのか。

防災とは違うが、「小滝の地域づくり考える会」をやっている。合い言葉で「寄って笑って賑やかに みんなで創ろう住みよい小滝」というものを今年から始めた。ウォーキングや男の料理教室をやった。高齢化の限界集落になってきたので、こういうものを、みんなで元気よくやっていきたいと思っている。

## 【知事の発言】

皆さんからのご意見を受け、知事からは次のような発言がありました。

命からがらの経験があって、喉元を過ぎるまでの間に、すぐ取りかかったから防災時体制表を作ることができた。県では防災意識調査を毎年9月頃にやっているが、平成23年は東日本大震災の直後ということもあり、8割の人が「防災意識が高まった」と答えたが、昨年の調査では「そのまま意識を持ち続けている」が39%、「意識が薄れつつある」が41%になった。

地震・津波で言うと、大きな津波が早い時間で来る地域では、高齢者や足の悪い方は、「私はもうええわ」という声が多いが、そうならないよう地域の方も一緒になって頑張ってもらっている。介護施設を福祉避難所みたいな形にして、要支援の方にも対応できるようにしていく。市町と県で福祉避難所の整備をしていく必要がある。基本的に逃げてもらうということで、最後まで努力する。見捨てるということは絶対ない。行政として、「それならそこにおってください。」ということも絶対ない。高齢者の方が「私はもうええわ」とならないように、平時から我々も理解を求めることをしっかりやりたい。いざというときにも、絶対見捨てることなくやり続ける。でも、助けに行った方が二次災害に遭ってはいけない。平時において意識を持ってもらうという努力をしっかりとっていく。

全県で広くという形ではできていないが、海沿いじゃないところで土砂を採って、海沿いに盛り土をしたりとか、採取した土砂を、海岸が減ってきているところに出したりとか、少しずつそういう研究もしている。堆積土砂を採ったら、土捨て場は基礎自治体の中でやってくれということが多いが、面積に限りがあり、捨てる場所にも限りがある。運ぶ経費もかかるので、バランスも考えて研究したいと思う。台風時の待機も含め、建設業との連携を既に実施している。東日本大震災を踏まえ、道路啓開の体制を作った。道路啓開マップもやっている。この辺で見えないだけかも知れないが、県全体としては、建設業協会との連携をかなりやっている。



#### 【地域で防災対策に取り組む皆さんとは】

平成 16 年 9 月 29 日（旧宮川村）に発生した台風 21 号豪雨災害の教訓を踏まえ領内地域小滝の住民が、自助の精神のもと自主避難、日頃からの防災意識、災害が予測される時の心得等を決め、防災対策に取り組んでいます。

また、大台町全体でも、過疎化の問題が深刻な状況であり、課題の解決を目指して町と一緒に考え、自らの地域で地域の未来像を描いた「地域プラン」づくりに取り組んでいます。